

「イースターおめでとう」

2018年03月31日

今年のイエス・キリストの復活日（イースター）は、明日の4月1日である。春分の日が過ぎて、最初の満月を迎えた週の次に来る日曜日が復活日になるので、毎年、変わる。クリスマスのように12月25日と日にちを決めてほしいという意見もあるようだが、月齢で定めた復活日を変えることはないだろう。この日、主イエスは十字架の死から復活した。この復活の証言を信じた者たちがキリスト教という新しい宗教を形成していった。

しかし、死者の復活など、あり得ないことで、当然、反論もあった。また、信じる人々の間でも、復活は多様に受け止められた。キリスト教は、聖書を「神の言葉」と信じて来たので、聖書の証言から、復活信仰を問うのが正当であろう。聖書では、パウロが紀元55年頃、コリント書（一）15章で「キリストの復活」について論述しているのが最初である。パウロは、聖書（旧約）に書いてある通り、キリストは人間の罪のために死に、葬られ、三日目に復活し、弟子たちに現れ、最後に、月足らずで生まれたような自分にも現れたと書いている。キリストが復活しなかったならば、自分たちの宣教は無駄で、偽証人となり、最も惨めな者となる。キリストは罪と死に勝利され、死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となり、キリストによって全ての人が生かされることになった。肉と血は神の国を受け継ぐことはできないので、復活の体は自然の命の体ではなく、霊の体である。霊の体とは、信仰において捉えられるということである。キリストに結びついているならば、全ての苦労は無駄にならず、益とされる。パウロのキリストの復活論は力強く、生きることを絶対的に肯定する信仰である。

4つの福音書は復活の出来事を記しているが、70年頃、最初に書かれたマルコ福音書の復活に関する記述は素朴で、尻切れトンボで終わっているが、興味深い。マルコ福音書から、復活を考えてみたい。下記のように書いている。

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。（16：1～8）

全ての労働と遠出も禁じられていた安息日が終わって朝早く、日が出るとすぐに、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメの3人の女性が、主イエスが葬られた墓に急いだ。一昨日、安息日が始まる3時間前に、息を引き取られた主イエスの遺体は丁寧に香油を塗られることなく埋葬された。彼女たちは、香油を塗り直そうと、墓に向かった。しかし、墓の入口は大きな石で塞がれ、彼女たちの力では動かせない。「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話しながら、急いだという。思慮を欠いた行動であるが、そうせざるを得ないほど、彼女たちは、主イエスの死を悲しみ、遺体を丁寧に

納めたかったのである。行って見ると、大きな石は脇へ転がされていた。墓の中に入ると、白い衣を着た若者が右手に座っているのが見えた。若者と書いているが、「白い」は「聖」を表すもので天使であろう。「右手」は祝福の方角を表している。若者は、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」と告げた。十字架につけられたナザレのイエスは復活された。ここにはおられない。墓は空になった。復活した主イエスは、弟子たちより先にガリラヤに行かれる。そのガリラヤでお目にかかれると言う。ガリラヤは、主イエスが福音宣教を始めた地である。ガリラヤの民衆は政治、経済、宗教と、あらゆる面で差別と搾取を受け、貧しさと病に苦しんでいた。主イエスは、その民衆に愛を語り、愛を具体的に現わされた。民衆は主イエスから、生きておられる神のリアリティを受け止め、「神の国」を実感した。復活した主イエスは、神の国を実感したガリラヤで出会われる。初めの愛に戻るということである。

主イエスの最期は無残であった。信従を誓った弟子たちから裏切られ、最高法院では、降格儀式によって、人格の全てが否定される侮辱を受けた。ローマの総督ピラトからは鞭打たれ、兵士たちから辱めを受けた。ローマに盾突く者として十字架につけられ、激痛を味わられた。主イエスの人間を愛した真実は完全に否定され、神なき世界に飲み込まれた。主イエスは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と、神不在の絶望の中から、「わが神、わが神」と叫んで、命を終えられた。孤独で、無法で、あらゆる限りの責め苦を受けた残酷な死であった。

この十字架の死から復活された主イエスは、初めの愛が息づいたガリラヤに行き、そこで出会われる。これは、主イエスを死に追い込んだ力は、復活によって敗北し、主イエスが現した愛は生き続けるという出来事であった。また、死を突き抜けた復活によって、罪と死が滅ぼされ、神の命が啓示された出来事であった。

婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失った。あり得ない死者の復活を告げられた訳だから、恐怖に震えたのは当然であろう。「だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」と、女性たちは沈黙したと、復活の証言を尻切れトンボで終わっている。沈黙して、どうして宣教できるのかという議論になる。しかし、沈黙の深さが、強い宣教を生み出していくのである。彼女たちは恐怖におののき、口を閉ざしたが、閉ざした口から強烈なメッセージを発したのである。当時、女性は裁判で証言する能力を認められていなかった。その中で、彼女たちは「主イエスは生きておられる」と語り、復活の証人となったのである。マルコ福音書は、追補の「結び」があるが、他の福音書のように、復活した主イエスの姿を伝えていない。

主イエスの復活は逆転、逆説を現す神の奇跡であった。① 有限な世界に死者が復活し、永遠が啓示された逆転であった。② 十字架の死に追いやる虚無から愛と真実の逆転が起こった。③ 沈黙の深さが世界に届く宣教を生み出す逆説が起こった。④ 証言能力が認められなかった女性たちから、福音が告げられる逆説が起こった。主イエスの復活は人の思いをひっくり返す新時代を生み出していった。イースターは、これらの逆転が私の身に起こり、神の命に与って生きる者とされていることを喜び、感謝する日である。